春燈

2月号

昭和二十二年七月二十二日第三種郵便物認可
平成十八年二月一日発行（毎月一回一日発行）第六十一巻 第二号

敦の句

抜参り初蝶にあひ蟇にあひ

『柿の木坂雑唱以後』平成二年

この年の春燈東海大会は、安住先生を伊勢・二見ノ浦にお迎えして行われた。先生にとって久方振りの「お伊勢さん」で、掲句は安住敦全句集唯一の〈抜参り〉だ。

さて、〈蟇にあひ〉は、実は二見ノ浦には蟇が沢山居るのである。夫婦岩への磯道に蹲居して観光客を迎える蟇は、興玉神社の祭神猿田彦の使いとされる。魁偉な猿田彦に似て大きな蟇。「無事にかえる」の謂もある。

冨山俊雄

PDF= 俳誌の salon

敦の句

浮御堂鳰の浮巣を秘中の秘

『柿の木坂雑唱』昭和五十五年

その日、浮御堂近くには心細げな鳰の子が一羽いたのみで、浮巣はついに見付からなかった。これが「秘中の秘」という印象的な、しかもロマンに満ちた言葉で簡潔に表現されている。そこに大きな広がりが感じられ、読者は自由に想像をめぐらし、心を遊ばせることが出来る。〈鳰の子のまだ親がかり浮御堂〉〈鳰の巣を揺るさざなみも近江かな〉共に敦先生のお人柄が偲ばれて忘れ難い。

中島節子

PDF= 俳誌の salon

西ケ原日記（十五）

鈴木榮子

歳の瀬の手帳二冊を合せ持ち

隙間風二階より来る夜となれば

寒拆とすれ違ふとて道ゆづる

PDF= 俳誌の salon

年の湯に沁み沁み沈め頤ぞ

柚子湯立てよとて四国より柚子一函

ペン先と謂ふ出遇あり事務始

初芝居宮居に近き三宅坂

除夜の鐘つく古寺の町（まち）内（うち）に

新春駅伝区間走者の足踏待つ

母の鏡台の寒紅に触れ少女たり

PDF= 俳誌の salon

特別作品（抄）

冬の音

小石珠子

かんかんとふゆあをぞらへししおどし
写楽絵の酢牡蠣に噎せしまなことも
夕霧忌投込寺に霚流れ
鳴き竜の余韻こもりし寒御堂
産土の磴を跳ねくる神楽笛
一翳もなき冬天へ街の音
鳴きつれて白鳥長き助走かな
雪晴や門にきれいなこゑと顔
重ね着てたはやすく齢とりしかな
風邪の神去りては戻る深なさけ

PDF= 俳誌の salon

特別作品（抄）

焔（ほむら）

小嶋恵美

水鳥の嘴の震へを羽に挿す
帰る家ありて水鳥去りにけり
沖暮れて船の寒灯すれちがふ
十一の集落十一の磯どんど
家内安全のお札どんどのてつぺんに
マスク掛け焔前線のがれけり
どんど火をのせて地球の夜が巡る
どんどの火思はぬ方に崩れけり
夫の持つどんど団子に火が移る
燃えのこる焔に遠し冬の星

PDF= 俳誌の salon

当月集

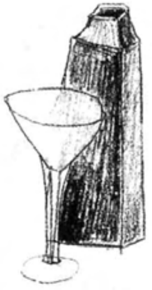
鈴木榮子選

○ 太田佳代子

冬紅葉里山は灯を点しをり
眠る赤手に母の面影神無月
冬の夜や吾子の臓器の音に添ひ
極月の眠りを引きて子は泣けり
寒雲や足踏み出せば景揺るる

○ 吉田かずや

標札に母まだ生きて花八ツ手
商ひに励む八十路の毛糸帽
障子張り手なれし頃は終りけり
撒骨も良かれと思ふ枯るるなか
着膨れに着こなしあるべきはずもなし



○ 菅沢陽子

東欧三同旅を了へ来し雪女
クリスマスあやつり人形市に買ふ
スメタナの「わが祖国」聴く煖炉かな
冬夜来て憩ふ異国のコンサート
咳こむやマリオネットの魔久たふる

○ 白神知恵子

返り咲く熊野古道の濃竜胆
世界遺産の古道へ開くる腰障子
狂ひ花熊野男坂に息乱す
その中の一碑に執す冬の蝶
檪落葉ひと葉ひと葉の承みかな

○ 山川好美

櫨紅葉林の奥に人の声
紅葉且つ散るダム底に見えぬ村
呆け芒筏通し場多摩史跡
青梅路や蕎麦屋二階も吊し柿
落葉焚く煙り直ぐなる過疎の村

PDF= 俳誌の salon

春燈の句

鈴木　榮子選

東京　荻野嘉代子

牛込にむかし席亭漱石忌
冬ぬくし御未引そとか夏日坂
朴葉味噌の香につつまるる初しぐれ
若冲の賽の河原や冬の山（石峰寺）

台北　陳　姝蓉

紅葉や雨後の雫に鼻打たれ
マネキンの秋服を買ふ江戸街道
秋味覚賞味期限のあとわづか
べつたら漬土産と決めて旅果つる

兵庫　朝霧はるか

村雲御所尼僧の凛と冬日濃し
冬麗や石窟深きに釈迦三尊
岩窟の釈迦ふところに山眠る
有為の身は風にまかせむ冬薔薇

岡山　間野　暎子

風花や最後の走者ゴールイン
故人祀る篤き心や冬衣（シルクロード展）

兵庫　川端　正紀

跳ねる海老料る夕べや木葉髪
背に肩に紅葉舞ひ散る遊歩道
立冬や円空仏の鉈の跡
生死宿して川遡る鮭の日や

大阪　中上　馥子

酢牡蠣大粒胃の腑にぽとり落ちにけり
鮟鱇鍋無口親父の壮語かな
梟のもの言ひたげに無表情
水洟を手の甲で拭く悲しさよ

千葉　西岡　啓子

鐘一つ撞けり小春の妙見山
十分間のリフトの散歩山小春
夕日中まぶしき鳰となりにけり
冬紅葉ふるさレ一近き人とをり
きのふよりけふあたたかし一葉忌
東京に過ぎし青春石蕗の花

PDF= 俳誌の salon

余　言

鈴木　榮子

障子張り手なれし頃は終りけり　　吉田かずや

平成十六年度「春星賞」受賞者。

自家で障子張りをする光景を見なくなりました。障子が好きで道路に面した二階正面だけは雪見障子を入れました。まだその上下の桟を上げたことはありません。

障子張りのビラが新聞などに入ってくると、そろそろ暮が近づいたと思います。

作者が自分で張ったかどうかは分かりませんが、この句の通り、手なれた頃は、そう多くない障子なら終ってしまうでしょう。

こうしてこうなった、という句ですが、納得させられることは、何にでも油が乗って来たところは終りさ、ということを経験しているからでしょう。

傘寿へとひと息に来て柿をむく　　古屋　喜水

傘寿は八十歳のことで男子の平均年齢も上り、八十台を迎える方がふえました。作者は教師だった方で、学生、生徒を育て送り出していると、年々が新しくその間に職責は果され、功は積んで来られましたが、不図気がつくとご自分も傘寿を迎えてしまいました。生徒と共々の日々をひと息に経て来た感慨を今更のように思われたのでしょう。

焦げぬ程度に身の裏表焚火の輪　　上野　進

焚火というのは懐かしい。焚火は子供だけでやることはないので、大人達や男の人達に交って子供もその回りで温まるというより遊んだものである。

勤めてからも帰路駅を降りて家までの間にちょっとした広場があると、商店主や若い衆がダンボールや燃えるもので焚火をしていると顔見知りでなくてもその輪に入って火に当たったものです。この句も身の裏表といってますが、確かに顔が火照ると背中をあぶったものでした。

鳥渡る古絵図に小千住大千住　　長谷川歌子

千住へ吟行にいきました。さすが芭蕉が旅立ちしたところで、そのころの盛んな宿場町の面影がありありと偲ばれますに―大千住、小千住―と称することもあったであろうと思われました。千住は大川の水路が入っており近郷近在からの、野菜の集積所でもあったのです。通りに面した家々、町並に青果市場の名残りを止どめ、家々には屋号の定番の木札をいまもきちんと掲げていました。町ぐるみで芭蕉旅立ちの千住を誇りに思っている町の心意気がありました。

大千住、小千住は日本僑の大伝馬町、小伝馬町の類と見ました。

PDF= 俳誌の salon